目　　次

いのちを表現するからだの知を育てる ～身体感覚を取り戻す～
…… 園長　片岡　康子 …… 1

本年度の研究について …… 5

第Ⅰ章　保育の４分野 …… 9

１．保育の４分野の考え方 …… 9

２．「からだ」の分野 …… 10

３．「もの」の分野 …… 25

４．「ことば」の分野 …… 42

５．「ともだち」・「なかま」の分野 …… 54

「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」教育課程 …… 75

第Ⅱ章　交流活動の記録 …… 79
～関わりあって学ぶ力を育てる～

１．今年度の異年齢交流活動 …… 79

２．小学校教師との連携 …… 80

３．５歳児と１年生との交流 …… 89

４．３歳児と１年生との交流 …… 94

今年度のまとめ …… 103

お　わ　り　に …… 105

いのちを表現するからだの知を育てる

—身体感覚を取り戻す—

園長　片岡康子

石をぶつけたらどうなるのか、足を蹴飛ばしたらどうなるのか、からだの痛みとしてつかんでいない子ども。「なぜこんなふうになってしまったのか、自分でもわからない」と語った非行少女。転勤族の父親に「友だちができなくて淋しかったことを言えなかった」とつぶやいた引きこもりの青年。そこには他者と関われないからだがある。数えあげればきりがないほど、からだの麻痺は蔓延している。昔の子どもたちが学んだ「からだの知」は、今遊びの中で学べない。

子どもの問題の多くは、生きる出発点である「からだ」、生きることそのものである「からだ」の問題として捉えられる。だらしなく足を床に投げ出して座る子どもを精神がなっていないと道徳的に捉える以前に、身体感覚を取り戻す必要性として捉えなければならない。子どものからだの時空間、宇宙のような神秘をもっている子どものからだの内側に目を向け、内側と外側の合体、すなわち「生きること」と「表現すること」がからだを接点にして実現するように、今の子どもたちを無意識に束縛しているものを解きほぐし、崩し、壊し、命の塊を納得させること、退化した身体感覚を取り戻す視点から子どものからだを照射することが必要である。

笑わない赤ちゃん

先日、乳児院に引き取られた「笑わない赤ちゃん」のドキュメンタリーを見た。「赤ちゃん」と「笑わない」ということばの違和感に釘付けになって見入ってしまったのである。

赤ちゃんは生まれて数週間で初めての笑いを見せる。人間社会へのエントリーの第一歩である。昔は「神笑い」、「仏笑い」とも、「天神さまがくすぐっている」などとも言ったそうである。外からの刺激がなくてもあらわれるので自発性の微笑、反射性の微笑ともよばれる。赤ちゃんの笑いにまわりの大人が微笑み返す、その応答が繰り返されることによって心地よい表現として、笑いはからだに刻み込まれる。

ところが母親から虐待を受け、信頼できる大人という存在を知らない赤ちゃんは、保育士さんがあやしても、くすぐっても笑わない、声をださない、泣かない。赤ちゃんの笑いは、優しい応答がなかったら、まして暴力が返ってきたとしたら育たない、という事実を突きつけられた。

ひとりの赤ちゃんについた保育士さんは、夜になると頭をベッドに何度もぶちつける、笑わないその子を、毎日、何度もあやし、信頼できる存在であることを伝える。しかし虐待のトラウマは予想以上に深く、赤ちゃんのからだは固く閉ざしたまま、数ケ月たっても奪われた表情は戻らず、頭ぶつけ

は続く。

そんなある日、笑わない赤ちゃんは中耳炎にかかった。そして、病院で、赤ちゃんは耳治療の痛さに、思わず保育士さんにしがみついて大声で泣いた。「痛いよね、我慢してね、いい子ね」と強く抱きしめながら、保育士さんは「この子は確かに生きている、感じている」という感動に震えたのであった。

赤ちゃんは反応するようになった。やがてことばも発するようになった。信頼という関わりに向って拓かれた「からだ」から「ことば」は育つのである。

しかし、一方で、人間はことばを獲得するとき、豊かに持ち合わせていた共感と共鳴の世界（からだ）から遠ざかっていき始める。知的に組みあがった社会体制のなかで適応していくためにたどらねばならぬ、なんとも矛盾した適応（成長過程）が人間には課されているのである。

我が幼稚園を巣立ち、小学校に上がった一年生の体育授業を参観したときのこと。動きの課題をどんどん速くしてもできるかどうかという挑戦ゲームのような導入に沸いている子どもたち。上手にできると、毎回、「やったー」と大声をあげる。隣の子と抱き合ったり、飛び上がったりする。ことばを発し、からだで表現する子どもたちの姿は眩しいくらいに輝いてみえた。いつまでも、表現するからだを失わないで成長してほしい。

反自然に“待った”をかける

脚本家早坂暁さんは、ある講演で、現代人の体がどうなっているかというと、「脳は巨大化して、目と鼻は退化して、脚や腕の力はだめだけど手や指はすごく進化して．．．」、これが現代人の姿です、と大きな頭と手だけ発達した、宇宙人のようなからだを描きだした。そしてこのような反自然に突っ走っているからだに“待った”をかけなければならない、と投げかけた。

高みから落ちれば痛い。ケガすれば血が出る。たくさん血がでれば死ぬ。骨を折れば、歩けない、ものをつかめない。水にもぐって4分もいれば死ぬ。それは植物が出してくれている酸素を吸えないから。そのようなからだの自然を知らせてほしい。そして自然界の生きものとの同志感、共感、いたわりも知らせてください。それともう１つ。みんなの力を感じさせてほしい。ひとりでは動かせなかったものが、みんなが力を合わせると動かせることを、体感させ、同時に、みんなでやる喜び、みんなでやることの難しさを教えて下さい、と。

３学期のある日、長縄とびをしている１年生を、難しいであろうと思いながら見ていた。

２人で声をかけて「イーチ、ニーイ、サーン、シーイ」、一生懸命に縄をまわす。タイミングを見て飛び込む子ども。続くこともあれば、あっという間に縄にひっかかってしまうこともある。２人で声を合わせ、力を合わせてまわす。入りやすいように声をかけてあげる。長縄に入る子の動きをとらえる。その子が入ろうとする瞬間、誘い込むように一層大きくまわす。まわす２人と飛ぶ子との３人が１つの呼吸になる。そんな時うまくできる。かなり長く続く。昔、遊びの中でつかんだからだの技（からだの知）は、今、学校の中で学ぶ内容として設定されなければならなくなったのである。

運動会での綱引き。ヨーイドンで一斉に綱に手をかけ引き始める。「ヨイショ、ヨイショ、ヨイショ」。同じ側にいるみんなが1つの呼吸で縄を引く。みんなの動きが1つのうねりになる。ひとつにな

った組が勝つ。心を合わせて、力を合わせる、である。

合唱。自分の声をだす。おなかから声をだす。自分の声を聞く。ともだちの声を聞く。たくさんの子どもがともだちの声を聞き、自分の声をみんなの声に溶け込ませていく。１つのハーモニーが生まれ、合唱となる。

わたしたちのからだにはいろいろな知恵がある。試行し、考え、認識する、その繰り返しによって、からだの自然は見えてくる。

からだをほぐす

80年代はじめ、人間存在としての「からだ」の問題に取り組む演出家竹内敏晴さんの著作に影響を受けた。竹内さんは、からだのゆがみ、ねじれ、こわばり、など子どものからだこそ、子どもがさらされている危機のもっとも直接的な表現なのだ、分断させられ、孤立させられた「からだ」をすくいだし、ひらかれ、他者とふれあうための、からだとことばを取り戻す道を探らなければならない、と考えていた。

竹内さんは、当時その手立て（視点）は大きくわけて２つである、と言われていた。1つめは「力を抜く」、２つめは「自由に動く」。この２つは、こわばって自由に動けない子どものからだに対するアンチテーゼである。

最近、「子どもたちは意外に疲れている」という声をよく耳にする。

子どもたちはリラックスできない。からだの力を抜けない。そんな時は，まず呼吸をゆっくり吐き出すことから始めると良い。子どもたちは、吸うことはできても深く吐き出すことができない。いや深く吸うこともできない。泳げない子どもは息を吐き出せないだけだと、ある水泳指導者も言っていた。ダンスでも息を吐き出すことから始める。息を吐ききれば、からだは自然に息を吸い始める。からだの力が抜けてくる。

息を吐き出して無防備になって、自分のからだの内側に着目する。凝っている肩、ねじれた背骨、反った腰に気づき、心臓の鼓動、呼吸する音も聞こえてくる。触れられた手のぬくもりにからだはほっと息をつく、抱きしめられたからだは大きな安堵感に包まれる。
そんなことを子どもたちのからだは忘れている。

３歳さんの「親子で遊ぶ日」に、からだ遊びをする時間をもらった。

３歳の親子と一緒に、「リズムにのって動く」、「親子の鳥さん」、「新聞紙になって動く」、「からだにょろにょろ・ぶらぶら」などをして、30分ほどの時間を楽しんだ。からだでの親子のふれあいが自由な動きの中でたっぷりとできることがねらいである。

・３歳児は踊りの天才だ。形を与えなくても、音楽が鳴っていれば、からだのいろいろなところでリズムをとり、全身をはずませて動きつづける。お母さんと手をつないでグルグルグル、お尻をぶつけてソレ、ソレ、ソレ、ふたりではずんでピョン、ピョン、ピョン。

・お母さん鳥は餌を探しに出かけました。あっ、おいしい餌を見つけてお母さんが帰ってきました。パクパクパク。おなかがいっぱいになった小鳥さんは遊びに出かけます。お母さんといろいろなとこ

ろに飛んでいきました。そんなイメージを投げかけると、子どもたちは母親と連なって、並んで、空間をめぐる。自由な動きで楽しむ表現世界は尽きることがない。

・さあー、みんなは新聞紙だよ。ピーンと張られた新聞紙、二つ折、四つ折、ぐしゃぐしゃに丸められた新聞紙。ころがる、広げられる、伸ばされる。角をめくる、真中をつまむ。どんな形にもイメージを働かせてこどものからだは変容する。

からだでつかむ空間感覚、近い・遠い・くっつくなどの他人との距離、早い動きの気持ちよさや遅い動きの静けさ、無言でも親と通じる楽しさ、人とリズムにのって動くと一つになれたように感じる開放感、いろいろなことをからだは学ぶ。

からだをからだでうけとめる

子どもの問題の根っこにはからだがある。からだで表現することができず、相手のからだのサインを読むことさえできない現代の子どもとおとな。叫びとなる以前のことばやしぐさを読み取り、受けとめる場を保障する、また子どもに表現する手立てを学ぶ場を保障する、という人間の関わりが強烈に意識されなければならない時代となったのである。

自分がなぜそのような行動を取ったのか、その無意識の表出の意味を受けとめてもらい、その意味を他者との関わりの中で自覚したならば、自己について他者と語ることができるようになり、「いのち（生きること）を表現する」という意識的な行為が始まるのである。子どもが真の姿をさらけだして語りあえないのではなく、その存在に関心をもってじっくりと聞いてくれる人がいないのではなかろうか。

学級崩壊状態のクラス担任となったある女教師は、「荒れている子、歩きまわる子をしっかりと抱きしめること」によって、学級を立て直したという。そして「子どもたちは存分に愛され、しっかりと抱きしめられていないのだ」とつくづく実感したと語っている。

また別の教師は、荒れている子どもを見ていると、からだをぶつけあい、肌に触れ合って、思う存分に遊んだ経験がないので、「もっと子どもをやらしてくれ」と叫んでいるように感じると語る。思う存分に遊んでエルギーを出し切ると、また新しいエネルギーがからだに入ってくる。子どもたちには、このリフレッシュの循環が不足しているのである。

生きて感じていることが上手に表現できないからだは、実は「ウワーツ」と大声をあげてわめいている。頭よりも先に、ことばよりも先に、からだが感じ取っているのに、でも外側に表現できなくて、こころとからだがばらばらになって苦しんでいるのである。

教師には、表現するからだの知を育てる力、子どものからだの状態を捉え、伝え、解決する手だてをもてるようになってほしい。「単に網膜に映るものをみているだけではなく、生きたからだを通して子どもたちの体験の中に分け入って目に見えないものを見抜いていく」。これこそが教師の中核的な仕事であり、からだで生きる人間をとらえることであろう。

おわりに

少子化、核家族化、都市化などによる子どもを取り巻く環境の変化について危惧されるようになって、すでに何年か経過しました。

都会の真ん中に位置する本園で生活する子ども達の姿からも「からだ」と「こころ」のつながりの大切さが一層重要なこととして認識されるようになりました。

また、平成13年度より幼稚園と小学校の連携についての開発研究を受けており、幼稚園教育と小学校教育のなめらかな接続と今後教育課程を編成することも視野にいれ、幼稚園の総合的な生活全体を「からだ」「ことば」「もの」「ともだち・なかま」の４つの分野から省察し、まとめました。

あくまでも事例にこだわり、カンファレンスを重ねる過程で、子どもの行為の意味、子どもの「関わる力の学び」の姿が浮き彫りにされてきましたが、研究成果の表し方、普遍化につきましては、今後の課題として重く受けとめております。

また、今年度は従来の枠を超えて幼稚園と小学校のさまざまな交流活動を実施することができました。「計画の段階では緻密に、実際の交流場面では子どもを主体に柔軟に」ということが幼稚園と小学校の教師間で確認されたことは、今後につながる成果といえるかと思います。研究の過程はゴールのない道、また、あらたな一歩を踏み出してまいります。

本紀要を御高覧の上、御指導・ご助言をいただけましたら幸いでございます。

研究同人

園長	片岡康子
副園長	松井とし
教諭	吉岡晶子
教諭	伊集院理子
教諭	上坂元絵里
教諭	髙橋陽子
教諭	佐藤寛子
教諭	清宮総子
養護教諭	渡邉満美